

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 慈円(多賀宗隼著, 吉川弘文館刊)   |
| Sub Title        |   |
| Author           | 太田, 次男(Ota, Tsugio)   |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1959  |
| Jtitle           | 史学 Vol.32, No.1 (1959. 4) ,p.120- 122   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 書評  |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590400-0120">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590400-0120</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 慈圓（多賀宗隼著）

かつて慈圓の歌集「拾玉集」や遺文類を整理し、『慈圓全集』

として學界に提供された多賀氏が、その後の新研究をも驅使して、このたび『慈圓』を書かれたことはまことに同慶の至りである。

傳記である以上、専門的或は部分的に止まらずに、「全體的な姿」が描かれようとするのは當然のことであらうが、極めて複雑で多面的な人間の生涯が、史料・方法上で如何に扱はれるかに興味と關心がもたらされた。

氏は「人がいかにその一生を充實したか」が傳記の問題の本質

であるとし、「人が歴史のために生れたのではない以上、人間の伝記は歴史の犠牲にされてはならない」といはれる。歴史の犠牲云々は少々奇異に聞えないこともないが、外部の動きや社會との關聯に於ける個人に重點が置かれ過ぎて、個人の獨自な生活内容がやゝもすれば從屬的に扱はれようとする傾向に對する批判として、氏の立場が示され、從つて「外からの客觀的な觀察の前に、内側からの共感がなければならぬ」と續けられてゐるのも當然のことであらう。

かういふ態度で慈圓に接するとすれば、何をおいても信仰生活が傳記の基調となるべきで、氏は終始信仰問題を中心テーマとして叙述を進めておられるようであるが、その取り上げ方には後述

するように、稍疑念がもたれる。更に、信仰を正しく理解して描くのに、體驗の缺如が叙述を如何に困難にするかといふことにも觸れられるが、これは信仰思想研究の上で解決困難な根本問題であらう。

また資料の點で目立つことは、和歌が自在に驅使されてゐることである。和歌を内面生活を知るための資料に使ふとすれば、「拾玉集」をはじめとする膨大な和歌はまさに無限の寶庫であらう。氏がこれを極めて重視されるのは當然のことである。ただ、慈圓の歌には年代不明のものが極めて多く、又意味の明確を缺くものも少なくはないが、細心の注意をもつて、年代のほど確實なものだけに使用は限られてゐるやうである。

次にこれらの扱い方について、二、三氣がついた點に觸れてみたい。氏もいはれるやうに、慈圓が攝錄家に生れたことは、謂はば運命であつて、彼は生涯これから自由になることはできなかつた。一體慈圓程、内外の生活の區別がつけ難い人物もすくない。若年の修行時代とか、兼實失脚後の隱棲時代とかは、本來からすれば、純粹に自己に徹することに終始できる時期であつた筈であるのに、實際には、それもできなかつた。外部からの要請もさることながら、それは慈圓個人の内的欲求であることも事實である。「拾玉集」にもこの明證があり、また「玉葉」に於ける兼實、慈圓の交渉にもそれを見ることができる。これは慈圓を考へる場合に、見逃すことのできない根本問題の一つであらう。「愚管抄」も

決して偶然に生れたものではない。

ところが多賀氏は、慈圓に内在する世間性を積極的に認めようとはされず、彼が外力によつて受動的に世間に出来ることになつたやうに説かれる。そこには、出世間・世間、そしてその辯證法的統一として、煩惱即菩提といふ一切が克服された境地に到達するといふ、豫定された圖式的コースがみえるとするのは、筆者の臆斷であらうか。氏は慈圓の世間、出世間の矛盾に苦しむ姿をしばしば述べてゐられるが、これらは無論否定さるべきではない。然しながら、例へば若年に「生涯無益」の由を語つて籠居の望みをくりかへしたことなど、氏が強調される程、煩惱のみにくさばかりがその原因ではなく、前途に對する不安といふことも考慮に入れられなくてはなるまい。或は自身の世俗的榮達に對する生涯に亘る厳しい自省と、眞摯な求道者としての姿は「多年を歷てただくことの爲めに、身をもてて、心をもてて、命をもてて、死んで生きる」といふ言葉に明示されてはゐるが、これにしても單に結果としての榮達に對する自省であるばかりでなく、自らの欲求に對する批判をも含めてゐるとみるべきではなかろう。概念的に單に一切の煩惱を否定するのではなく、世俗的欲望も熾烈であればこそ、一層それに對する反省にも厳しいものがあるであらう。氏が、慈圓の使ふ佛語をその時々のニュアンスによらずに、その言葉自體を概念的に解釋し、それに従つて逆に慈圓の行動そのものを規定されようとして、些か疑念を禁じ得ないものがある。確かに慈圓は内省的な求道者ではあつたが、

一方かなり自由であり、また幅廣く、公武併立時代にふきはしい獨自な型の人間であつたものと思はれる。

次に、前にも觸れた和歌の取上げ方について、もう少しつけ加へておきたい。氏は歌そのものについては「慈圓にあつては、この思索の迹がただちに和歌の形をとり、心の動きがたちまち歌となつて口を衝いて出てくる」「日々時々刻々の自己の、いつわらぬ披瀝であり吐露である」といはれるが、これは歌と思想との關係について稍近代的に過ぎる解釋ではなからうか。氏も指摘されるやうに、當時一人で六萬首の作歌が可能である程、頗る多作の時代であり、その點は慈圓も同じく、一時のうちに百首つくり得たことを得意げに記してゐる程である。またしきりに本歌とりが行はれてゐたことも衆知のことであつて、従つて類型的なものが多く、獨自性といふことは問題ではなかつた。かう考へると、歌は慈圓にとつて生活感情の一種の表現ではあつても、思想の正しい表現として、これを使ふことには稍躊躇せざるをえない。例へば氏が「ひじり」に對する批判を歌つたものとして引用された、よしの山思ひともかひもあらじうき世の外のすみかならねば

わが身こそかくしかねれかつらぎや奥なる谷もうき世なりけりなどにしても、類似のものが他の歌集にもみられるのである。慈圓が歌の道に秀でたことは贅言を要しないが、これとは全く

別個の問題である筈である。

以上蕪雜な言を連ねたこと、御寛容願ひたいが、本書が全體としての纏まりをもつと共に、各項目にわたつても、適切な解説がほどこされてゐること、史料が博搜されてゐる上に巻末の史料目録に信頼が置けること、佛教關係の記述が比載的多いことなどの點で、從來の類書に見られない特色をもつものであり、思想史に興味と關心とをもつ者の見逃すことのできないものとして、一讀をお勵めする。

(太田次男)

## 彙報

昭和三十三年度史學科春季見學旅行

五月二十七日、深大寺・大國魂神社・善明寺・高幡不動を見學す。一行は伊木・松本(芳)・森・河北の諸先生、志水・高橋兩先輩及び學生約三十名であつた。

## 第六回早慶連合史學會

早慶史學會第六回大會を昭和三十三年十一月午前十時から日吉第四校舍四十九番教室に於て開催した。研究發表者及びその題名は次の如くである。

魏書の成立とその時代  
平安時代中期農民の動向

尾崎 康(慶)

昭和三十三年六月廿五日 於二番教室  
メコン河を遡りて  
カンボジヤ調査談

松本 信廣氏  
清水 潤三氏

一田堵を焦點として—

奥野 中彦(早)

Stephan Born とドイツ労働運動  
エルンスト・トレルチの政治思想について

東畠 隆介(慶)  
仲手川良雄(早)

公開講演(午後二時)  
明代驛遞の勞役問題

清水 泰次(早)

初代廣重の一作品を繞つて(スライド使用)

淺子勝二郎(慶)

なほ當日斯道文庫本の一部を展覽に供した。

## 三回史學會例會報告

### 第四五回例會

昭和三十三年五月十日 於一〇一番教室 新入生歡迎會

### 第四五三回例會

昭和三十三年六月廿五日 於二番教室